

# F1600前へ



アグレッシブ

DELECTION SHUHEI NISHIZAKI  
TEXT by AKIHIRO KOMIYAMA  
PHOTO by SADAHO NAITO

2月7日気温10℃、路面温度8℃、路面状態・ウエット。この日午後3時30分より、T-サーキット・英田(岡山)において、今年のF1チャンレンジカップレースシリーズがスタートした。

この開幕戦を制したのは、ポールポジションから順調にアドバンテージを伸ばし、終始安定した走りを見せたジエミニカートP&DのNO6である。

このNO6をドライブしていた彼は、F1ドライバーとなってこれが初めての優勝。レース終了後、彼のピットは、朝からの雨を吹き飛ばすようなチームスタッフの歓喜に包まれていた。が、そのとき彼は一人ピットから出て、いつもより低い空を見つめていた。

いま、彼はあの空を『掴める』と信じている。限りなく遠いものと思っていたあの空を、いま彼は『掴める』と確信していたのだ。それは彼にとってこの雨空のように自分に近づいてきたF-1600という夢の空…。

彼の名は水野昇太。どこことなく唐沢寿明に似た顔立ちの彼は、河原町を歩いていけば、一度は出会えそうな雰囲気を持つ、見た目はごく普通の好青年。だが彼はただの青年ではない。

そう、彼は1998年F1で最も注目されているレーサーだ。

数年前からのモータースポーツブームでF1は、いまでは巷の基本的常識。だがF1となると、まだモータースポーツファン以外、未知のモノだろう。

このF1とは、日本独自のフォーミュラ規格の呼称で1980年にスタートさせたF1600クラスのこと。



世界各国によってその名称は異なるが、レーサーの頂点・F1を指す若いレーサーたちの原点というクラスである。このF1は、原点といわれるようにマシン自体も名だたるフォーミュラカーの中で最もシンプルな型をしている。

空力付加物の装置は一切禁止され、見た目にレーサーかと思わせる前後のウイングすらない。タイヤも決して特別なモノは用いず、市販のラジアルタイヤを使用し、更にエンジンとタイヤはワンメイクと決められている。

つまり、ほとんどマシンが改造できない。構造面に関しても、他のフォーミュラカーに比べると、お世辞にも高いレベルといえず、まさにシンプル・イズ・ベストといった風体である。

これだけを聞くと、レースをあまり知らなければ、F1のレースは面白みに欠けると感じるかもしれない。

しかし、実際のF1は、かなり見たえのあるバトルが展開されることが多く、ある意味では、カーレースの中で最も面白いレースといわれている。

それはマシンがシンプルな分、各マシン自体のレベル差がほとんど無く、全ては、それをコントロールするドライバーの腕と駆け引きにあるからだ。

つまり、ほぼ同一環境でバトルが繰り返されるので、他のクラスでは見ることのできない、レーサー自身のセンスとテクニクが存分に堪能できる。

F1ではマシンの性能の差が目に見える。純然たるレーサー同士の白熱したバトルが展開される。これがF1の最高

## 水野昇太選手を応援して下さるスポンサーを募集しています。

お問い合わせ先

PEEK-A-BOO RACING

〒604 京都市中京区竹屋町東洞院西入三本木5-464-1

TEL (075) 255-6202

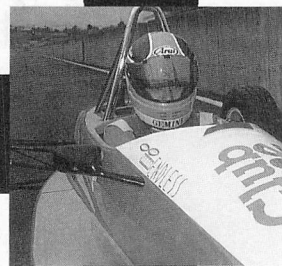
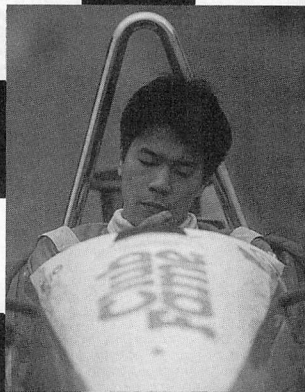
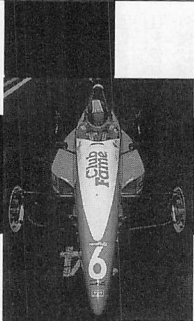
の魅力といっても過言ではない。  
最近、このFJには1000台近くがエントリーされ、より激しいバトルがレースごとに展開されている。だからレーサーは表彰台に上がることはおろか、予選を通過することも難しいという。そんな状況で彼は注目されているのだ。

彼の魅力を観衆や関係者に尋ねてみると必ず返ってくる答えは「アグレッシブな走り」という言葉。

が、彼はこの言葉をあまり好まない。「周りの人によくそういわれるんですけど、アグレッシブな走りって『野生的カンでただ攻撃的に走る』といった頭を使わない感じがするんです。だけども、ボクの走りはただ攻撃的じゃないんですよ。周りがアグレッシブというのは、下位から追い上げてもスピンして順位を落としたり、最速ラップを出しているのに3位止まり、といった派手な部分だけでそう感じるんですよ」

余談だが、昨年の彼のレース展開は、ポールポジションを取って逃げ切るパターンよりも、下位から攻撃的にチャージをかけて、ポジションを上げていくパターンが多かった。

「確かにボクの走りは、攻撃的に見えるかもしれませんが、レース中はけっこう冷静なんです。もし攻撃的なだけだったら、命がいくつあっても足りないですよ。それに、いまは強力なスポンサーがいらないからマシンは絶対に壊せない。だから、ボクは他のクルマと攻撃的に争うといった感覚よりも、いかにその状況に応じた走りができるかを常に考えて走っているんです。ただ



ガムシヤラに走れば、勝てるなんてものじゃないんですよ、レースは。しいてボクのアグレッシブをいうなら、走りというよりも自分との戦いですね。」「レーサーは誰でも『勝ちたい』と思う。が、はやる気持ちを『アグレッシブに抑える』ことが実は彼にとつての戦いである。そして勝負を決するポイントがやってきたとき、抑えてきた『勝ちたい』を一気に爆発させる。その瞬間が観客たちの目に『アグレッシブな走り』と映る。つまり観客が『アグレッシブな走り』を目にしたとき、彼の戦いはすでに終わっているのである。

水野昇太が『アグレッシブ』と言われることを好まないのはそのせいだ。今年に入って、彼は着実に、そして確実に自分の走りを掴みはじめています。

2月20・21日に鈴鹿でおこなわれたFJレッシュユマントロフィーレース—NSUZUKA第1戦。彼はそれを証明するかのようについに連続優勝を飾った。

ポールポジションからのスタートだったが、スタートに手間取り、いきなり後退。だが、彼の走りはラップが上がるごとに順位を上げ、ついにはトップを捉え、連続優勝を果たしたのである。

彼はいま、周囲を魅きつける何かを持ちつつ、レースごとに進化している。「出会ったころに比べると、今年に入っただいぶ変わってきましたねアイツは。一昨年からフリーのレーサーとディレクターという関係になったんですが、メンタル的にもテクニク的にも、ひと回り成長したっていう感じですかね」彼の傍らでその魅力を語る男がいた。

つづく